様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520252
研究課題名（和文）　ヴィクトリア時代のカトリック・ルネサンス研究

研究課題名（英文）　A Study of the Catholic Renaissance in the Victorian Age

研究代表者
野谷　啓二（NOTANI KEIJI）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：80164698

研究成果の概要（和文）：プロテスタンティズムを国是とするイングランド体制は、カトリシズムを異化することにより国民文化を創出した。英文学の規範的系譜もそれに含まれる。しかし、蔑視されてきたカトリシズムは、ヴィクトリア時代の中世主義と 20 世紀の反近代主義によって、新たな価値として復権される。ニューマンが形成し、エリオットに受け継がれる、権威の所在を「教会」に求める潮流は、啓蒙主義以降の懐疑の時代に、「確信」の対立軸を示す文学を創造した。

研究成果の概要（英文）：Alienating Catholicism, the English Protestant establishment forged the national culture, a part of which the canonical works of English literature form. Catholicism reemerged in the Victorian period and remained until about the close of the Second Vatican council as a dominant counter-cultural force, creating the literature of “firm belief” in the authoritarian Church against a backdrop of the humanistic trend of enlightened skepticism. The roles of the two leaders, John Henry Newman and T.S. Eliot, are discussed and found to be truly indispensable figures in the Catholic Renaissance..

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米・英語圏文学
キーワード：カトリック・ルネサンス、ジョン・ヘンリ・ニューマン、ベロック

１．研究開始当初の背景

カトリック文化・文学研究が遅れているのは、わが国だけではなく、イギリスにおいても同様である。リンダ・コリーらが明らかにしたように、宗教改革によって国民教会を創設し、「名誉革命」を経て確立された、プロテスタンティズムを国是とするイギリスの体制は、国民に神との特別な関係を自覚させ、国民国家から帝国へと成長する歴史的発展過程の中で、国民に「神の選び」を実感させた。それと同時に、この体制を拒否する人々を国民の枠から除外した。体制は No Popery！(カトリックは出て行け！）という標語を使い、カトリシズムとその信徒を異化することにより、国民文化を醸成した。プロテスタントの体制文化に対して、カトリシズ

ムは反キリストの輩の信仰として、蔑みの対象となったのである。

こうしたカトリックに対する偏見が醸成される背景には、まず、マリアをはじめとする諸聖人に対する崇敬（場合によっては崇拝）や聖体の実体変化(transubstantiation)など、進歩主義的なプロテスタントから見て、魔術的儀式中心の迷信で、暗黒時代の中世を髣髴させるものだという批判、つぎに、司祭、修道士、修道女の独身制が、ヴィクトリア時代の家族重視のエトスと衝突するという状況があった。さらに安価な労働の提供者としてリバプール、グラスゴー、ロンドンなどの都市に大量に移住し、イギリス人の職を奪ったアイルランド人の宗教だという現実社会の要因とも結びついていた。こうした偏見は、世俗化した今日の知的状況にも生き続けている。少なくともプロテスタント文化は、批判的、懐疑的性質を有し、科学的精神にも合致するとみなされた。ところがカトリック信仰は、教皇の不可謬性の教義宣言に見られるように、権威主義的であり、知的ではないと理解された。このように、カトリシズムはイギリスでは反近代的なものの象徴であり、マイノリティの宗教であり、「知的な」研究者の研究対象にはなりにくいという事情があった。

しかし、ようやく、宗教改革以後のイングリッシュネスの構成を見直そうという、主に歴史学の分野における修正主義の動きのなかで、カトリシズムを見直す研究が現れてきた。本研究もそうした流れを受けて、カトリシズムの復興現象が現れたヴィクトリア時代のカトリック信仰文化・文学に着目する。

２．研究の目的

この研究は未だ十分に開拓されているとは言えない。カトリック復興が 1829 年のカトリック信徒の政治的解放という歴史的事実と関係し、カトリック神学がオックスフォード運動によって受容されたことによって可能となったことに留意し、文学作品だけではなく、神学、イギリス教会史、一般英国史の研究成果も参照する必要がある。テクスト研究における歴史研究の例証的アプローチと、文学研究の分析的アプローチの両方を活用し、学際的に行おうとするところに、本研究の特色がある。近代国家イギリスの成立と維持という目的と固く結合したプロテスタント主流文化の中で、カトリック文化はどのようなものとして表象され、また自己をどのような形で提示したかという問題設定は、国民国家内の規範文化と対抗文化の関係研究としても意義があると考えられる。フランスのカトリック至上主義体制におけるユグノー研究があるように、アングリカン体制内のカトリシズム研究も行う必要がある。

３．研究の方法

(1) ヴィクトリア時代のカトリック復興を研究するためには、宗教をめぐる当時の政治状況とカトリック教会の実態を理解しなければならない。したがって、本研究の特色としてあげた文学、歴史学、神学の学際的研究方法を選択する必要がある。文学テクストの内容分析アプローチで得た知識を、他領域の研究成果を生かして整理された時代背景理解の中に例証的に解放する。

(2) カトリック再評価の動きを準備したウィリアム・コベットの宗教改革再評価の書 *A History of Protestant Reformation in England and Ireland* (1824-27)および *Rural Rides* (1830)と、彼の歴史観に影響を与えたイギリスのランケとも称されるカトリックの歴史家ジョン・リンガードの *History of England* (1819-30)の意義を検証する。コベットについては、小池滋氏がかつて『もうひとつのイギリス史』(中公新書、1991 年）で「今日コベットは不当なほど忘れ去られている」と嘆いたが、状況は今も変わっていない。G.K. Chesterton と G.D.H. Cole の古典的研究の他に Richard Ingrams の *The Life and Adventures of William Cobbett* (HarperCollins, 2005)が参考になる。併行してカトリックに改宗した建築家・デザイナーであるピュージンのゴシックリヴァイヴァルについても理解を深めなければならない。初めての伝記、Rosemary Hill の *God's Architect: Pugin and the Building of Romantic Britain* (Allen Lane, 2007)は 600 ページを超える浩瀚なものであるが、カトリック的な視点がヴィクトリア時代にどのように浸透していったか教えてくれる。その他、わが国ではまったく知られていないといってよい、フィリップ・デ･ライルとケネルム･ディグビィの中世趣味についても検討する。カトリシズムがイギリス文化の中でいかに執拗に敵視されてきたかを明らかにした最新の研究書、Michael Wheeler の *The Old Enemies: Catholic and Protestant in Nineteenth-Century English Culture* (Cambridge University Press, 2006)は出色の出来映えであり、本研究に大いに役立つだろう。また中世主義に関する Michael Alexander の研究 *Medievalism: The Middle Ages in Modern England* (Yale University Press, 2007)も不可欠な研究である。

(3) カトリック復興の素地を明らかにするため、復興の中心人物である J.H.ニューマンに焦点を当てる。ニューマンは福音主義的な回心体験から信仰に入り、アングリカンの司祭となってオックスフォード運動を主導し

たが、ついには国教会が「使徒継承による正統性」を欠いているという結論に至り、カトリック教会に改宗する人物である。青年期の回心体験により、啓蒙主義の精神的世界から自己を切り離し、内面世界に沈潜し、自我と神との関係を意識化する。自己定義の必要性に駆られたロマン主義的な自我を持っていた近代人ニューマンが、自己をヴィクトリア的なものの外に位置づける結果となる、権威主義的なカトリック教会を選択した背景を、新しいニューマン研究に依拠しながら明らかにする。一次資料としては *Parochial and Plain Sermons*, 8 vols.さらに *Fifteen Sermons preached before the University of Oxford*、*Lectures on Certain Difficulties felt by Anglicans in Submitting to the Catholic Church* (1850)、*Present Positions of Catholics in England* (1851)を読み、ニューマンの精神世界に迫る。ニューマン研究としてはFrank M. Turner, *John Henry Newman: The Challenge to Evangelical Religion* (Yale University Press, 2002) が参考になるであろう。教会史の権威Owen Chadwickの *The Victorian Church* (Adam & Charles Black, 1970-72) 2vols.そして同著者の *A History of the Popes, 1830-1914* (Clarendon, 1998)も必読書である。

(4) ニューマンの文学作品に焦点を当てる。ニューマンには小説作品が２つと、ヴィクトリア時代の人々に人気が高かったJ.キーブルの *The Christian Year* (1827)に比肩する詩、*The Dream of Gerontius* (1865)をはじめとする *Verses on Various Occasions* がある。『ゲロンシアスの夢』に示された死生観を、福音主義文学の死生観と精密に比較検討する。さらにニューマンのカトリック文学を、国教会と非国教会の信仰文学、そして不可知論者の文学との関係の中に位置づける。直接ニューマンの詩に関わるものではないが、Jill Muller, *Gerard Manley Hopkins and Victorian Catholicism* (Routledge, 2003) と、少し古い研究であるがAlison Sullowayの *Gerard Manley Hopkins and the Victorian Temper* (Columbia University Press, 1972)、さらにG.B. Tennyson, *Victorian Devotional Poetry: the Tractarian Mode* (Harvard University Press, 1981)は、ヴィクトリア時代のカトリックの詩を理解する際に参考になる。ニューマンの他にも、ホプキンズ、クリスティナ・ロセッティの詩についてもカトリシズムの視点から研究する。

４．研究成果

(1) 一九世紀前半にアイルランド問題を契機としてカトリック信徒の解放が行なわれ、ジョン・ヘンリ・ニューマン(John Henry Newman, 1801-1890)らによるオックスフォード運動によって、カトリック教会の復興に弾みがつけられ、カトリック信徒の中からも「知識人」が出てくることになった。カトリック知識人――その多くはイングランド教会からの改宗者である――が、一様に持っている特徴は、反近代の姿勢である。彼らは知的確信に基づきカトリック教会を選択したのであるが、教会の反近代主義に、一九世紀近代の潮流に対立・対抗する価値観の提示者としての教会に、引き寄せられたと言っていい。一六世紀の宗教改革によってカトリック中世の諸価値を否定されたカトリック信徒が、中世を高く評価するのは当然のことに過ぎないようにも思われる。しかし、彼らが西洋近代に対して危機意識を持ち、アンチモダンになる契機は何であろうか。彼らは、産業革命以降に顕著になった物質主義による霊的価値の喪失、拝金主義的態度、money makes money 思想に人間性の喪失を見出したのである。彼らカトリックの知識人は、西洋近代の神の喪失の流れに抗して宗教改革以前のいわゆる「メリー・イングランド」の理想に帰ることを希求したと言えよう。

(2) 中世の真理観においては、知識は真理に至るための瞑想(contemplation)の対象であったが、近代においては、ベーコンが喝破したように、知識は力となり、神秘性は宇宙から消えた。新しい人間は、神そのものとは言わずとも、神の役割を消失させ、「暇な神」(Deus otiosus; God at leisure) を誕生させた。世界は人間中心的に解釈し直され（ヒューマニズム)、新しい人間は中世的な、神中心の価値観からの解放を求め、人間の自律（自立）性の確保を旨とし、それを求めることこそが近代人であることの証左とした。新しい自己崇拝の宗教の誕生である。個人の確立、自己選択、自分の足で立つことが「人間らしさの哲学」のすべての前提となった。したがって、近代人が時の趨勢に逆らってまで伝統的教会に――地上における神の代理人である教皇を頂点に、枢機卿、(大) 司教、司祭、一般信者というヒエラルキー構造を温存させ、マリアをはじめとする女性聖人を除けば、女性を冷遇するかに見える教会に――あえて所属し、教会の教導権にしたがい、価値観を共有する生き方を選択[この選ぶという行為自体は近代のもの。カトリック知識人が改宗者であることから来る必然]した、彼らの哲学には、自律性がないように見えるが、教会共同体のなかに身を置くという自己奉献の自律的決断があると言わなければならない。彼らと近代人を分ける分かれ目は、一六世紀宗教改革をどのように見るかにかかっている。プロテスタント宗教改革が打ち壊したカトリック世界は、善きものであったか、

悪いものであったか。カトリック知識人は当然、善きものと考えるわけであるが、彼らは反近代の旗を掲げ、近代の諸問題を解決するための理想的鍵を宗教改革以前の中世に見出し、いわば歴史を顧みながら前に進もうとした。一九世紀半ばのカトリック復興はイングランドだけに起った特異な現象ではない。ただ、宗教改革を成功させ、プロテスタンティズムを国是とする「威風堂々」のキリスト教国家であるといイングランドの国民意識とは裏腹に、現実においては、産業革命による社会構造の激変と帝国主義による対外膨張の結果発生した諸問題のために、中世的価値が積極的な意味を持つものとして対比されやすいコンテキストが生まれていた点は強調されるべきである。かつて否定されたカトリック的伝統に根ざす価値が新しい価値として提示される素地ができていたのである。

(3) イングランドにおけるカトリック復興は興味深いことに、イングランド最初の、そして最後の植民地であるアイルランドの状況が関係している。アイルランドはカトリック国であるが、政治経済的ヘゲモニを握ってきたのはイングランド系のアングリカンと、北アイルランドを中心とするスコットランド系のプレスビテリアンであった。The Church of Ireland はその名が示すように国教会であり、宗教改革を認めない「劣等な」カトリック・アイルランドを Anglicize するための中枢機関であった。ところが、地域によっては信者の数がほとんどいない主教区が存在する事態が一九世紀初頭に問題視されるようになり、統合による合理化が行なわれることになった。問題は合理化の主体が誰であるかということである。アイルランド教会はその母教会であるイングランド教会と同様、国教会(the Established Church)であるので、アイルランドにおける主教区の削減は、教会の意志ではなく政治の、国家の意思ということになる。そして、国家の意思を表す議会の構成は、選挙制度改革によって必ずしも国教会員に限られるものではなくなる方向が見えていた。こうして意識化された世俗国家の教会への介入という問題は、国教会の本質を揺るがす深刻なものととらえられた。そうした国教会の危機を訴えた聖職者の代表格が、問題点を指摘する National Apostasy の説教を 1833 年に行ったジョン・キーブル(John Keble, 1792-1866)であり、オックスフォード運動の中心的人物と目されるようになったニューマンであった。彼らにとって教会とは、使徒継承(apostolic succession)の教会、すなわちペトロの上に教会を造る、というキリストのことばに基づく共同体のことであった。この使徒継承性こそが教会の本質であり、アイルランド主教区の削減は、それを人間の政治的判断で傷つけるという暴挙であった。近代の国民国家創成過程で造られた、その意味で人間が造った教会だという、国教会批判にも通じる問題意識を含む批判であった。オックスフォード運動は、結局、国教会の中にカトリック的なものを復活させた。ニューマンは 1845 年にカトリック教会に転会するが、残されたピュージー(Edward Pusey, 1800-82)は、国教会にカトリック的な典礼、マリア崇敬、告解など、宗教改革以降によって否定された価値を再導入した。

使徒継承の教会というカトリック的教会観の浸透は、オックスフォード運動のもっとも重要な遺産となったが、それと連動して強調されたのは、キリストの受肉の教義(Incarnation)である。一神教の時間観は時に始めと終わりを想定する。時自体が神の創造であり、アダムの堕罪によって堕ちてしまった世界を再創造するために、神はその一人子を時間の中に送る。これが受肉の神学であり、この摩訶不思議な、人間理性では到底理解できないドグマが、一九世紀のアングリカン信者の共感を呼ぶこととなったのである。実は神が人となる神秘に魅せられた聖職者は、一七世紀のアングリカン教会に多くいた。代表はランスロット・アンドルーズ(Lancelot Andrewes, 1555-1626)である。オックスフォード運動の文献学的貢献は、初代教父の文献を『教父叢書』として、アングリカンの一七世紀神学者の文献を『アングロ・カトリック神学叢書』として刊行したことである。イングランドの国民教会であるが、実際にはカトリック教会であると主張する人々――カトリックといえば字義通りには普遍(カトリック)教会として、ネイションを超えるはずであるが――が、近代が成熟し、イングランドが世界の覇権を握ったかに見えた時代に現れ、初代教会、受肉神学に魅せられたジャコビアン、キャロラインの神学者たちと自分たちの連続性の意識化をはかったのである。

(4) ローマ教皇権の伸張は、イタリアが一九世紀にようやく国民国家として成立していく過程で、教皇は封建として所有していた教皇領(papal states)を失い、地上の権力をほぼ喪失した結果、逆に霊的権能が高まったことから起った。教皇権が伸張していた時期に、カトリック復興を実現させていたイングランドのカトリック知識人たちは、未だに「カトリックは出て行け！」(No Popery!)の思想風土から抜けきれず、プロテスタンティズムを国是に世界を Anglicize しようとするイングランドの覇権国家体制に抗して、異なるものとしてのカトリシズムを有意義な選

択肢として突きつけた。イングランドの国家像の見なおし、真のイングリッシュネスの探求が彼らの急務となった。確かに、一九世紀末までにイングランドは、神に祝福された信仰告白国家(confessional state)として、大英帝国に「成長」していた。グレート・ブリテンは単に、ブリテン諸島の一つ、フランスのブルターニュに比して大きいという意味を持つ地理学的名称ではなくなり、偉大なブリテンとなり果せたのだった。しかしながら、カトリック知識人は、その「成長」にイングランド本来のアイデンティティ、イングリッシュネスの喪失を見出す。焦点はやはり、宗教改革の見直しである。そこから近代の迷妄が批判される。こうした近代批判の流れ、系譜を創り出したのは、ジョン・リンガード(John Lingard, 1771-1851)の英国史であり、それがウィリアム・コベット(William Cobbett, 1763-1835)の痛烈な筆の力を借りて社会一般に広がっていったのである。最近ではいわゆる修正主義者たちの歴史研究により、学会においても the Protestant bias of the Whig historians が暴き出されるようになった。カトリック知識人たちは、イングランドをヨーロッパ大陸と接続し、ラテン・ヨーロッパの一部であるという言説を唱え、イングランドを相対化しようとした。

こうして培われたカトリック知識人の反近代主義思想は、二〇世紀においては文芸上のモダニズムの騎手であった T.S.エリオットに引き継がれる。彼もまた一七世紀のアングリカン神学者の著作、フランスのシャルル・モーラス、ジャック・マリタン等の思想に触れてアンチモダンの姿勢を鮮明にしていった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①野谷啓二、神の恩寵の現われとしてのマリア、Kobe Miscellany、No.34、2012 年、19-35、査読無.
②野谷啓二、Characteristics of T. S. Eliot’s Christian Faith、*Journal of the T. S. Eliot Society of Korea*、Vo.21、No.2、2011 年、107-123、査読有.
③野谷啓二、贖いの祈りを奏でる詩、*T.S. Eliot Review*、No.22、2011 年、39-56、査読有.
④野谷啓二、遠藤周作のキリスト教―教会の喪失と神の再発見―、『近代』105 巻、2011 年、1-22、査読無.
⑤野谷啓二、もう一つの殉教劇の問題点、*T.S. Eliot Review*、No.21、2010 年、53-67、査読有.
⑥野谷啓二、中世主義者としてのイーヴリン・ウォー、キリスト教文学研究、No.27、2010 年、123-136、査読有.
⑦野谷啓二、カトリック者にとっての死――ニューマン『ゲロンシアスの夢』を読む――、*Kobe Miscellany*、No.33、2010 年、1-17、査読無.

〔学会発表〕（計３件）
①野谷啓二、ベロックの反近代主義、関西アイルランド研究会、2012 年 3 月 18 日、大阪経済大学.
②野谷啓二、マイクに向かうモダニスト――T.S.エリオットと BBC――、日本英文学会関西支部、2011 年 12 月 18 日、関西大学.
③野谷啓二、Characteristics of T.S.Eliot’s Christian Faith、T. S. Eliot Society of Korea、2011 年 10 月 7 日、Korea University.

〔図書〕（計１件）
①野谷啓二、他、研究社、モダンにしてアンチモダン――Ｔ．Ｓ．エリオットの肖像、2010 年、223-238.

６．研究組織
(1)研究代表者
野谷　啓二（Notani Keiji）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：80164698